

## 「おばけが来るよ」は魔法の言葉？



先月も読書の話でしたが、今月も絵本の話から入ります。最近、「ぐりとぐら」の中川李枝子さん、「いやだいやだの絵本」のせなけいこさんの訃報が相次ぎました。「ぐりとぐら」が発表されたのは1963年、「いやだいやだの絵本」は1970年。半世紀以上に渡り、世代を超えて多くの人に愛されてきました。保護者の方も子どもの頃に親しんだ覚えがあるのではないのでしょうか。「ぐりとぐら」については、ホットケーキが焼きあがる場面が大好きで、「ホットケーキおいしそう、食べたいなあ」と思った覚えがあります。せなけいこさんの絵本については、自分が読んでもらった覚えはなく、親として我が子に読んだ絵本という記憶しかありません。イヤイヤ期の時期には大活躍で、「いやだいやだ」「ねないこだれだ」を連日読み聞かせていました。脅したらいけないと思いつつも、「おばけになってもいいの?」「やだー」「じゃあ寝なさい」と、手段として使ってしまったこともありました。

### ■「怖いもの」は子どもを守る知恵

「ねないこだれだ」に出てくるおばけは、大人からするとどこことなくユーモラスな感じがしますが、昔話や言い伝えなどには、とても怖い話があります。昔から日本では、子どもが危ない場所に行かないように、悪い行いをしないようにと、鬼や妖怪、おばけといった“怖いもの”を引き合いに出して伝えてきました。それは昔の人の知恵なのでしょう。私が子どもの頃に怖かったのは、閻魔大王です。

「嘘をつくとも閻魔様に舌を抜かれるよ」と、事あるごとに大人達に聞かされてきました。近くのお寺にとっても怖い顔をした閻魔大王像があり、間近で見た印象がより拍車をかけました。嘘をつくのはよくないことだ、とインプットされたのは言うまでもありません。最近では「鬼から電話」など、スマホなどで手軽に使えるアプリが同じような役割を果たしているでしょう。



### ■「おばけが来るよ」「鬼が来るよ」は効果的？

「〇〇しないとおばけ(鬼)が来るよ!」という言葉は、最初は効き目があるかもしれませんが、ですが、段々慣れてくると効果が薄れてきたり、逆に恐怖心が芽生える年齢になると、恐怖心が勝って出来ないことが増えてきたりする場合があります。恐怖というのは、他の似たような状況へと広がっていきやすいという特性があるそうです。おばけが怖くて寝られない、暗闇が怖い、トイレに行けない、一人で部屋にいられない、などなど。怖い存在というのは、ひどくなるとトラウマとなる可能性もあるので、有効とは言えないでしょう。

### ■心がけたいのは「ポジティブな言葉がけ」

以前見たデータの話ですが、4~8歳の子どもが怖いもののトップ3は、①おばけ ②虫 ③雷 という結果が出ています。

小学校高学年になると「お父さん」「お母さん」などもランクインしてきますが、1位は依然として「おばけ」です。

小さい頃に芽生えた「おばけ恐怖」が、中学生になるまで治らないことはよくあることです。

「おばけが来るよ」は出来なかった時のデメリットを伝えて、子どもをやる気にさせるやり方です。ここでお勧めするのはその逆で、「ポジティブにメリットを伝える」という方法です。

「今、お風呂に入ったら、寝る前に〇〇で遊ぶ時間があるよ」

「玩具のお片づけが終わったら、公園でたくさん遊べるよ!」など。

どのような行動を取ったら、どのような楽しいことが待っているかを具体的に伝えてみましょう。

忙しい日々の中、つつい子どもを大人のペースで動かしたくなりますが、メリットを伝えるポジティブな言葉がけを続けることによって、子どもとの関係性が変わってくると思います。すぐに変化は実感できないかもしれませんが、ぜひ長い目で見て、試してみてください。